

### はじめに

モチベーション研究所の年次報告書『モチベーション研究』第10号をお届けいたします。本号は原著論文2本、研究ノート3本、研究所フォーラム抄録を1本掲載することができました。ご投稿いただいた皆様、ならびにフォーラムでご講演内容の掲載にご快諾いただきました澤江幸則先生（筑波大学体育系准教授）に、あらためて御礼申し上げます。

今年度はコロナ禍の影響もあり予定されていた2020年2月および11月のフォーラムについては中止とさせていただきます。第15回にご講演を予定していた林卓史先生（朝日大学経営学部准教授）には大変ご迷惑をおかけしたことこの紙面を借りてお詫び申し上げたいと思います。

なお、林先生のご講演については初めての試みとしてオンライン形式にて2021年2月に再度お願いする予定となっています。その内容についても次号に掲載を予定しております。

### コロナ禍の時世

2020年の年始にこの1年がこのような事態になると誰が想像したでしょう。いつも通りに大晦日を迎え、テレビ越しにNHK紅白歌合戦をみて、初詣に出かける。2019年から2020年の年明けはこのような「いつもどおり」で始まった方が多かったと思います。しかし2月3日とCOVID-19は日本においても猛威を振るいはじめ、4月5月の緊急事態宣言の発出というなかで感染症の脅威を日本人が知ることになります。

2020年は自粛、無観客、中止、配信という言葉が世間を埋め尽くし、さらに東京都の感染者数の爆発的増加という不安も追加され、例年とは異なる2020年の大晦日を迎えることになりました。そして1月には日本での緊急事態宣言の再発出という出口の見えない状況へと陥ることになっていきました。

コロナ禍を論じることは多くのメディアで行われていることであり、我々医学に疎い研究者がそれを論じても机上の空論でしかありません。ひとりの国民として感染予防に貢献することは当たり前のこととして、根拠のない自説を通して世間に余計な不安を広めることについては慎まなければならないと考えるのは私だけでしょうか？

大学人としてこのコロナ禍のなかで思いを巡らせたこととして「大学とはなにか」といことでした。アメリカの教育社会学者のマーチン・トロウは高等教育の在り方について、高等教育は「エリート段階（就学率：15%未満）→マス段階（50%未満）→ユニバーサル段階（50%以上）」へと量的に拡大するに伴い、教育の目的・機能、内容・方法、学生の選抜基準や組織特徴が質的に変容するとして「トロウ・モデル」を提唱しました。

私自身、大学のマス化、質の低下が叫ばれるようになって全共闘後の3無主義の時代を生きてきました。受験戦争の敗者として大学時代を過ごし、誰も助けられない社会に抗うかのように「普通」になることに逆らいながら自分を模索していたことを思い出します。今からすれば「エリート」のための教育を「普通の民」に行っていた大学の教育は「トロウ・モデル」をまだ理解できていなかったといえるでしょう。しかし、そこには「大学」としてプライドがあり、教員にも「自分の教えるべきこととは何か」ということが自覚され、それに賛同する学生のみを受け入れていたというアイデンティティが存在していたと回顧しています。当然のことながら現代は「ユニバーサル化」した大学において上述のような内容は求められていません。大学進学者の量的拡大に伴い、教育の目的・機能、内容・方法、学生の選抜基準や組織特徴が質的に変容してくことはむしろ必然であるといえます。

大学の意義は授業だけではなくそこで行われる諸活動であり、そこで育まれる人間関係であり、そこから社会で活躍する人材を輩出することであることを十分理解したうえで上述のような安直な考えを巡らせてみました。昨今、コロナ禍での大学のリモート授業について学生からも賛否の意見が出ています。この大学のリモート授業に対する捉え方についても、もしかしたら学生自身の中に精神的な「トロウ・モデル」があり大学に対する期待がその賛否を分けているのかもしれないと、これまた勝手な考えが頭をよぎったことも蛇足ですが付け加えておきます。

今年度は井田政則先生、仲嶺真先生の2人の特任研究員にご参加いただいたにも関わらず、思うようにモチベーション研究所の活動ができなかったことを率直に反省し、今後、研究に限らず新たな方向性についても検討の段階に入りたいと考えています。今後とも皆さまのご理解とご支援を賜ることができますよう、よろしく願い申し上げます。